

第79号

平成20年6月12日

高二B 中山裕介  
高二B 長谷川皓大

# 読書三昧

甲南中学・高校  
図書館  
図書委員会  
芦屋市山手町  
31番3号

## ～ 小林聖心女子学院との 交流会の報告～

### 昨年度の図書委員の活動

|     |  |
|-----|--|
| 四月  | 中2～高3までの図書委員が決定                                  |
| 六月  | 兵庫県私立SLAに参加(白鹿記念館) 灘校図書委員と読書会実施 (灘甲戦) 小林聖心女子学院来校 |
| 九月  | 中1の図書委員が決定 読書三昧発行(第78号)                          |
| 十一月 | 古本市開催  |
| 十二月 | 図書委員選定図書 店頭引抜                                    |
| 今年  | 読書三昧発行   |

昨年六月三十日に小林聖心と甲南の図書委員が交流会を開き、両校とも様々なジャンルの本について語り合いました。

交流会の途中では、二十世紀最大の悪事と呼ばれるナチスドイツのユダヤ人大量虐殺(ホロコースト)も話題に上がりました、その理由は…

### 「小林聖心との交流会」

前年度中三 佐竹 優輝

僕たち2007年度甲南中高図書委員の活動もそろそろ山場を迎えつつある中、前回の灘中高との交流会に続

り、それぞれの学校と図書館の特徴、また相違点を知る事ができました。

甲南と小林の大きな違い、例えば、半分手書きの図書館通信や入荷本速報表、そして各個人の本の独特な評論(色々な本を女の子らしい視点で捉えていました)などです。(どれも相当な労力が惜しみなく使われています。お疲れ様です。)

その他、さまざまに思った事は、完結していないシリーズマンガが図書館内に設置されていて、なおかつそれを借りられる事、また、DVDを自宅に持ち帰る事ができる事(一日だけ)などです。

今回の交流会では最初に一つ驚いた事がありました。

それは、戦前のナチスによるユダヤ人迫害や戦争に関したことを著した本やアンネ・フランクの日記、はたまた聖書に關しては厳しく指導されていて、普通はあまり見かけないような本まで借りられていた事です。

その理由はというと、学校がキリスト教を教育の柱としていて、平和教育を教えているためです。その教育の一端として第2次世界大戦下のユダヤ人の生活を学習の一つとしているそうです。

甲南にもそういった平和教育が充実している世界に通じる紳士への道も広げやすくなるのでは?と想っていました。

また、今回も恒例の推薦本(愛読書)の紹介があり、みな十代の選別した本とは思えないほど内容の濃い本ばかりでした(司馬遼太郎や哲学書まで色々...)。しかし、広報誌では十代らしくない選書と

### 目次

1. 小林聖心女子学院との交流会について
2. 文化交流祭・古本市の感想
3. 井村先生「テーマパーク」
4. 文化祭・古本市の感想
5. 図書委員選定図書について
6. 本の紹介・編集後記

は打って変わって女子学生らしい本が紹介されていました。

甲南の図書館通信ではめったに載せる事のない青春ドラマ小説やセラピスト関係の本、またファンタジー小説や女の子が主人公の本など多種多様に広く深く紹介されていました。先にも言いましたが半分手書きの広報誌なので、甲南の図書館通信のようにならなくとも無機質さの残るものではなく、ページもかなり多かったです。また、生徒参加型の広報誌だったので読んでいて飽きないし楽しいとも思いました。

でも、この広報誌一番の特徴といえる、そ

の読み易さでしょう。文字は大きいし、紹介する本一冊についてのスペースを多くとっている事、また、その本に関する文献からの文章の引用など、アイデアの盛り込まれた素晴らしい紹介をしていた事良かったと思います。

これらのようにお互いが両方の相違点を比べる事ができたので、それらを今後の図書館運営に役立てる事ができるだろうと思います。

ただ、この交流会は期末考査の一週間前に行われた会だったので、体力的にも精神的にも少し追い込まれた感じでした。次回からは時期をもう少し考えて、交流会

を行ってほしいと思っています。しかし、それでも両校共に本当に良い交流会に

「小林聖心との交流会」  
前年度中三 内海 隼人

今回は、図書委員の仕事として二回目の交流会となります。交流会をします。小林聖心の校内新聞の紙に驚きました。それは、灰色の再生紙で、環境問題を学校内で実践しているのだと実感しました。

なれたらと僕も思っています。また小林聖心と交流会を開きたいなとも思いました。

次に思ったのは本好きが多いということ。一冊の本でしばらく話せるという方がたくさんおられました。僕は本を読むときは「おもしろい」と思っています。読んで



後は「考えさせられる」といつより読破の満足感に浸るくらいで、また続きのある本だと「早く一巻目を読みたいな」と感じます。考える時といえは国語のテストの文を読むときくらいで、自分でも「こんな無知なやつがここにいて何ができるのだろっ」と考えもしましたが、逆に考えれば「自分の視野を広げられた」と言えるのではないのでしょうか。僕はミステリー小説を全く読んでことがなく、特にミステリー小説の話には聞き入りませんでした。

方々が多かったため、その分、様々な見方を甲南・小林の交流会で話しました。

単行本サイズの本がかなりオススメされていました。これは、読みやすいのに持ち運びが楽なからだと思います。

「本を読むことは作家と話すことだ。」というのを聞いたことがあります。ただ本を「おもしろい」と読むのではなく、著者が何を言いたいかを考えながら読むことが大事だと思います。これからも色々な本を読むことでさまざまな人の作品と出会っていろいろと書いています。

今回の交流会でそういった「見方」、「読み方」、「考え方」を色々な方がかみくだいて説明して下さいました。本とそのジャンルについて少しは知識を得たと思います。



私は、神戸生まれの神戸育ちである。親父の仕事の都合で、幼少期に一年だけ神戸を離れ、栃木県の今市（「いまいち」と読む。東照宮で有名な日光の近く）に住んでいたことがあるが、それ以外

テーマパーク  
国語科 井村彰宏



私達は、今回国語科の井村先生に原稿を依頼しました。

井村先生の本に対する思いを感じ取ってください。

私は、神戸生まれの神戸育ちである。親父の仕事の都合で、幼少期に一年だけ神戸を離れ、栃木県の今市（「いまいち」と読む。東照宮で有名な日光の近く）に住んでいたことがあるが、それ以外

はひたすら神戸。「神戸っ子」である。神戸に住んでいると、買い物に行くにしろ遊びに行くにしろ、やはり三宮が中心となる。大阪に出ることもありますが、大抵は神戸三宮で事足りてしまふ。今で

も、三宮をよくぶらついている。食事・買い物・遊び。全ての中心は三宮なのだ。

教員になって二年目であるが、仕事帰りで暇を見つけては三宮によく行く。特段目的があつて行くわけではない。センター街やミント神戸などをぶらつと歩き、買いたいものを見つけたら衝動買い。休憩したくなれば、国際会館のスタバでひと息。腹が減れば、気ままに店に入って食事。

無計画な行き当たりばったりで時を過ごすのだが、これが、私には最高の気分転換・息抜きになる。

そんな「三宮ぶらり歩き」であるが、毎回必ず立ち寄る場所がある。それは「ジュンク堂」と「紀伊国屋書店」である。そして、怒濤の立ち読みを敢行し、気に入った本があれば購入するのだ。

本屋に行つて、どういつ本に注目しているのかというと、これが全くいつて決まっていない。ジャンルはバラバラ。まさに、その時

の気分次第、硬派な本を手にとるときもあれば、それこそ笑いだけを追及した本を手にとるときもある。授業で使えそうなテキストやらを読んだかと思えば、タレント本コーナーやホビ雑誌コーナーで立ち読みをしていたりする。本を手にとつては読み、また別の本を手にとつては読みの繰り返し。最後の締めは、大抵「月刊タイガース」「週刊ベースボール」の立ち読み。本屋を出る頃には、三時間ほど時間が経過、というパターンとなる。

この「目的のない立ち読み」が、たまらなく楽しい。思わず感心する情報から、本当にどうでもいいたらない雑字まで、ありとあらゆる情報が本屋には溢れている。これらの情報を、無作為に拾っていくのが面白い。

情報の中でも、くだらない雑字が意外と使える。そして、重要である。とんでもなく無益に思える雑字でも知っているだけで価値は生まれてくる。思い

返してほしいのだが、つまらない雑字だとしても、知ってしまった以上は、それを人に話したくなったり、自分で実践したくなったりしたことはないだろうか。そういったことを思った時点で、雑字には価値が発生したと言える。また、くだらない雑字も、知れば知るほど、それは視野(考え方)を様々な方面へ広げることに繋がる。雑字を知るイコール、今までの自分の中には無かった知識(価値観)を得るといふことを意味する。新しい考え方を会得できるのだ。くだらない雑字も、捨てたものではない。

ネットでは「見るだけ(眺めるだけ)」の情報・雑字も、本屋では書籍という形で、手に取つて読むことができる。ネットの「見る・眺める」と違い、思わず惹かれて、興味を持って自ら進んで「読む」のが本である。よつて、本から得た知識は頭によく残る。ネット社会と言われて久しいが、より鮮明に自分の中に

情報を取り入れたい(残したい)のであれば、断然書籍である。以上より、私は、本屋ほど楽しくて、かつ有意義な情報を得ることが出来る空間は無いと確信しているのだが、どうだろうか。本屋は一番身近な「テーマパーク」である。単なる暇つぶしでいい。本屋に行つてみると、きつと面白い情報との出会いが待っているはず。しかも立左読みなら、お金が掛からない。タタで、気ままに情報収集できるなんて、素晴らしい。なんといふことでしょうか(本屋サイドには迷惑極まりないだろうが)。暇つぶしで立ち寄つたつもりが、実は有意義な時間に変つているのである。これが、本屋の真骨頂。三宮のジュンク堂・紀伊国屋書店で、私に似ている人間を見つけた場合、それは間違いなく井村である。過去に二度ほど、生徒と本屋で遭遇しているが、その時は幸運にも、私が手に持っていた本は硬派な書籍であつた。お

かげで、生徒には「教員らしさ」を演出することができた。が、実を言つと、出会う直前までは、タレント・高田純次著の「手のつけようがないほど、くだらなくて面白い本」を持つていたりする。表紙からして、お笑い一色の本だつた。しかも、

それを私は購入してしまつた。どうしようもないネタ好きである。どんな内容の本でも、自分の手に取つた瞬間、それは「知識の泉」となる。様々な本を手にとつてもらいたい。そうすれば、知識の泉はもはやあなたのものだ。下準備での「二千冊近い本の分類、値段わけ、運搬、etc...」文章としてみるだけならば簡単そうに見えるかもしれないが、それぞれに創意工夫が必要とされて骨の折れる作業だつた。

それで、私はその大変だつた時間は楽しかつたと思言できる。祭りには遊ぶ人達も楽しめるが、真にそれを楽しめるのは裏方であるところか、聞いた事がある。

文化祭期間に入つてからの図書館から三階の教室までの本の運搬作業に始まり、本棚の作成に値札の貼り付け、古本市の店番のシフトの決定、そして古本市の当日の慌しさはあれから四ヶ月以上経つた今でも覚えている。特に文化祭翌日は午前十時に開店してから午後五時近くまで古本市に携わつていてほとんど休憩

た事もあり経験もあることだし、それほど苦勞する事もないだろうと若干見通しを甘くしているところがあつた。しかし、実際に自分が主役となつて古本市に参加するとすぐに様々な問題が見えてくるようになった。下準備での「二千冊近い本の分類、値段わけ、運搬、etc...」文章としてみるだけならば簡単そうに見えるかもしれないが、それぞれに創意工夫が必要とされて骨の折れる作業だつた。

昨年十一月三日の文化祭の様子やそれまでの準備の様子を元図書委員長の難波さんが書いてくださいました。また、古本市での収益の寄贈先なども書いています。ぜひ読んでください。

『文化祭・古本市回想録』  
卒業生 前年度図書委員長 難波将広  
光陰矢の如しとはよく言つたが、今更には自分も甲南を卒業したといふ実感が持てていない。あつといふ間に月日は流れ、自分も高校生ではなく、なつたのに人使いの荒い副委員長に役使されている感じがもしれないが、それは兎にも角にも既に舞台を去つた役者だがここで楽しかつた思い出を文章として残す事で今の私の急情に過すだけの日々のせめてもの暇つぶしとさせていただきます。

さて、人にとつて最も幸福を感じる瞬間とはいかなる時であろうか。私はこう思つた。目標を持つて勝負もつたそれに向かつて邁進している時である。図書委員は慣習として一年周期で文化祭にて保護者の方々から集めた本を販売する古本市を行つた事になつて、私は今年の十一月三日に行われた古本市では、三年前の古本市、つまり二〇〇五年の古本市にも私は参加し

た事もあり経験もあることだし、それほど苦勞する事もないだろうと若干見通しを甘くしているところがあつた。しかし、実際に自分が主役となつて古本市に参加するとすぐに様々な問題が見えてくるようになった。下準備での「二千冊近い本の分類、値段わけ、運搬、etc...」文章としてみるだけならば簡単そうに見えるかもしれないが、それぞれに創意工夫が必要とされて骨の折れる作業だつた。



を取る事も出来ず、くたにくたになった。ただ、それは自分だけではなく他の図書館員達も一緒です。と私以上に働いてくれた人も居た。

図書館員みんなで一つの事を成し遂げるといふ小さな祭りの始まりから終わりまでの古本市の成功という目標が見えていく、がむしやりに進むだけであつた日々は自分の中でも最高の思い出の一つだ。

私は人の一生は銃の弾丸のようであれば良いと思う。自分の人生をかける価値がある夢を抱き、

たまたまそれに一直線に向かつていけるような生き方だ。しかし、現実人は弓から放たれる矢でしかない。矢は遠くの的に当てようと思えば上に傾けて撃たなければならぬ。また、風の影響を受けやすく一直線に飛ぶことはできない。

文化祭での古本市の成功という自視できるくらいに短い距離にあるのに私はまっすぐに飛んでいくことができた。そして、目標に向かって仲間達と協力してそれを達成するという幸福を享受できた。

ところが、今の私には的が見えなくなってしまう。漠然とした夢ならばあるが、それはあまりにも遠くにあつて視認する事も出来ないのだ。これから先に、私だけでなく今年甲南を卒業した皆は様々な風を受けながらもはるか遠くにある人

生をかける価値のある目標を見つけて飛んでいくのだ。そんな時に距離は短くとも一つの的を指して弾丸のように推進した日々が輝いてくるのではないかと私は思うのだ。人は決して弾丸のように夢に向かって直進して

いく事は出来ない。しかし、たとえ矢であつて真真正正に飛んでいく事はできません。とも目標を達成する事はできるのだ。しっかりと目標を見据えてひたすらそれに向かつていけば矢であつても的に当たる事ができるという。ひどく単純な事

かもしれないがそれを我が身で実感できた事は自分がこの古本市を成し遂げて得る事が出来た最大の収穫である。最後に今更ながら、古本市に本を寄贈して下さった保護者の方々ははじめのころ古本市に携わった全ての人々に感謝を。

そして、この駄文の読者でも体質衰や文化祭といった行事で何も活動に参加しておらず、かつ日々がつまらない人は是非とも何か自分の近くにある目標を見つけて直進して言うて欲しいと私は願う。それでは、老兵は死せず、ただ去るのみ。後は

### 古本市での収益の寄付先 『Room to Read』について

『Room to Read』は一九九九年に当時マイクロソフト社の重役であったジョン・ウッドによって設立された法人であり、発展途上国での学校や教材不足といった教育問題での持続的な解決策を打ち出すことを理念としている。



世界の約三十の主要都市に「チャプター」と呼ばれる拠点を置き、現地コミュニティと協力しながら学校や図書館を設立する活動を行っている。現在はカンボジア、インド、ラオス、ネパール、スリランカ、ベトナム、南アフリカ等の子供に教育を与える資金が深刻に不足している国々で活動しており、バングラディシュとザンビアにも活動を拡大しようとしている。二〇二〇年までに一〇〇〇万人の子供に学びの場を届ける事を目標として、発足してから一三〇万人超の子供達に教育の機会を与えてきた。

#### 二〇〇七年九月までの『Room to Read』の主な実績

- ・二八七の学校を建設
- ・三八七〇以上のバイリンガル図書館を開設
- ・一三六のコンピューター/語学教室を開設
- ・一四七タイトル、三〇〇万冊以上の児童書を寄贈
- ・三四四八人の少女に長期奨励金を給付

また、『Room to Read』は途上国の子供に教育を届ける為に様々な援助プログラムを行っており、金額に関係なく、私達の資金援助を待ち望んでいます。是非、興味がある方は後述のURLにアクセスしてみてください。

URL : <http://www.roomtoread.org/> より

若い者に後を託。こころ

また、我々図書委員は今年の古本市での収益である四万五千四百二〇円に二〇〇五年度二〇〇三年度古本市の収益の余りを合わせた合計から手数料五百二十五円を差し引いた八万二千九百八十五円をアメリカの法人「Room to Read」に寄贈させて頂きました。

「Room to Read」については前述の記事を参照ください。



十二月二十五日

我々図書委員(前三年生含む)の中から十人ほどが三宮のジュンク堂に選書に行きました。その時に、選ばれた本は数多くありますが、今日はその中から二作品ほど紹介させて頂きます。

(高一 箱川 義樹)  
(高二 長谷川 皓大)

図書レポート 「あおぞらの星」と「こころの授業」

高一 箱川 義樹

僕がこの本を選んだ理由は、夜回り先生である「水谷 修」さんのことをテレビなど色々な所で見聞きし「本を書いている」ということを知って読んでみたいと思ったのがきっかけでした。

今回、僕が読んだ夜回り先生シリーズの「あおぞらの星」と「こころの授業」を読んで、今まで図書館にあった夜回りシリーズよりも、より深く興味深い作品になっていた。

最近も嫌がらせやイジメはなくなり存在し続けている。いじめる側は決してそのことを自覚していない。それはなぜか？ 簡単なことです。される側の気持ちを少しもわかっていないからだ。

もし、する側の人間がいるのなら、全部の作品を読めとは言わない。だが、せめてこの2作品を少しでも読んで欲しい。そして、考え直して欲しい。今までやってきたことを。

そして、出来ることならされている側の人をかばえる人になってほしいと思う。

著者名 水谷 修

出版者 日本評論社

分類 (Y)読みもの(文庫)・みず



『はいはいアース』

高一 長谷川 皓大

私がこの本を読んで一番印象に残っているのは、ベルが物語のはじめに行った村で、暴れていたネグロニーという怪物と戦って殺してしまうところです。ネグロニーは、本当は故郷に帰りたくて暴れていただけだったのですが、そのことにベルが気づいたのはネグロニーにとどめをさしてからでした。ベルも故郷に帰りたくて願っていたのですが、記憶をなくしてどこに故郷があるのかわからない状態でした。ネグロニーは自分が死ぬ間際に自分の種をベルに託します。その種が発芽するとネグロニーになってしまうので、村人はすべて砕こうとします。

しかし、ベルはたった一つだけ持って行き、家に帰る途中で投げ捨てます。私はそこできっとベルはネグロニーの故郷に帰りたいと言う気持ちが痛いほど分かったんだと思います。だから、故郷に帰れない代わりにひとつでも願いをかなえてあげようと思ったのだと思います。そこからベルのやさしさや伝わってきました。ベルは自分のことを野蛮と言っていますが、それは本当の顔ではなく、本当はとても心やさしい人だと思いました。

著者名 冲方丁

出版者 角川書店

分類 (Y)読みもの(文庫)・うぶ)



予告 《図書館が、こころ。》 橋本紡企画のこ案内

ただいま、作家の橋本紡さんが書いた図書館が「こころ」という作品に図書委員が挿絵を入れて本にしようとしています。この作品は、ある高校の図書館に司書としてやってきた女教師とその学校の図書委員の話です。すっかり廃れてしまっってぼんやり自習室同然になってしまった図書館を立てなおそうとする物語です。

近々図書館で読めるようになるので、お楽しみに！

### 『ちーちゃんは悠久の向こう』

卒業生 前年度高二 前中 公瑠

作者の日日日(あきら)さんはこの作品で新風舎文庫大賞を若干18歳にして受賞し更にこの作品は映画化・DVD化されています。

「ちーちゃんこと歌鳥千草は小さなころから幽霊とか妖怪とか、そういうまがましいものにときめいてしまう難儀な性質を持っていた。こんな文章からはじまる『ちーちゃんは悠久の向こう』。この物語は、主人公のもんちゃんこと久野悠斗が語り部として彼の変わるこがなかつたはずの日常をつづって行きます。始まりは高校生になったとき、ちーちゃんがオカルト研究部に入部して二人が学校の七不思議を調べることから、始まっていく高校生活の物語です。

この本は好みがあはつきりと分かれる作品だと思えます。軽く読んで読みやすくライトノベルのような本ですが、内容はそれに反して少しぞつとするような物語で主人公に感情移入するのがめりこみ目が離せなくなってしまうと思います。ただしそれができずに読む事に集中ができなかつたらたまらなくつまらない本になってしまうでしょう。

この本の中で少し変わった臆病な主人公が私にはとても人間らしく見えます、ずつと変わらないまま友達であつたちーちゃんとの日常、主人公に痛みを与えていた、でも自分には血の繋がった家族だと思っていた家庭、けれどもこの主人公にとつても小さな世界は二人が七不思議のひとつをといたことからある人にとつてはとても不幸な世界を形成して行くのですが・・・。

著者名 日日日  
出版社 新風舎  
分類 (Y読みもの)(文庫)(あき)



### 『セロひぎのゴーシュ』

前年度中一 清水 康志

ゴーシュの仕事は、楽団でセロを弾くことなのですが、僕は、音楽に対してあまり情熱がないので、仕事にはできないと思いました。ゴーシュはプロの音楽家なのに楽器が下手だという事は、みつともないと思いました。

しかも、夜遅くに、ゴーシュが練習をしていたら様々な動物たちにもけなされて、動物にまでばかにされるゴーシュがかわいそうでした。

ところが、動物たちの話をきくと、病気を治すためにゴーシュのセロを聞いていたとわかって、僕は驚きました。

とくに、「インドの虎狩」を動物たちのために練習したおかげで腕が上がり、本番の舞台で大成功を収め、楽長からも聴衆からもほめられて、本当によかったと思いました

寝る間もおしんで練習すれば、下手と言われていても上手になれるんだなと思えました。

著者名 宮沢賢治  
出版社 角川書店  
分類 (Y読みもの)(文庫)(みや)



### 『ドラゴンラーヂャ』

前年度中二 小林 正浩

韓国発のファンタジー作品で、日本で社会現象にもなり、シリーズ累計100万部突破の作品です。

主人公は優しく素直な17歳、フチネドバル、彼は旅の途中でエルフヤドワーフはもちろん、たくさんドラゴンたちやさまざまな人種、種族と出会います。族の中である時は敵、またある時は味方となるのです。ドラゴンを従える存在(ドラゴンラーヂャ)をめぐる全12巻の物語は、どれもワクワクする面白いものです！文章は読みやすく、挿絵も

多いので、すぐに引き込まれてしまふと思います。



作 イヨンド  
訳 ホンカズミ 絵 金田栄路  
出版社 岩崎書店  
分類 (Y読み物)(イ・1)

### 『編集後記』

お待たせいたしました。6ページに及ぶ昨年度の総まとめです。昨年と今年との図書委員達が、全力で制作しました。昨年に書いてくれた原稿をたくさん載せています。また今回は、井村先生にも原稿を書いていただきました。読み応えたっぷり6ページ、ぜひお楽しみ下さい。(図書委員一同)